

Title	「わけだ」と「というわけだ」：補文標識「という」の介在
Sub Title	
Author	大場, 美穂子(Ōba, Mihoko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2024
Jtitle	日本語と日本語教育 No.52 (2024. 3) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「わけだ」と「というわけだ」

—補文標識「という」の介在—

大 場 美穂子

1. はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 (2015) 『中級日本語 (上)』の第9課文型7 (p.89) では「・・・。(という) わけである」という文型が扱われており、次のような例文が挙げられている。

- (1) 昔、中国では、くわや刀の形をしたお金が使われていた。しかし、そのようなお金は欠けたり割れたりして使いにくいことがわかってきた。それで、丸い形のお金が使われるようになったというわけである。
- (2) 留学が終わり、国へ帰ったら、日本でのことをいろいろ家族や友達に話すつもりだ。その時に写真があった方がいい。だから、いつもたくさん写真をとっているというわけだ。

「わけである」という文型を扱う上でまず問題になるのは、「わけである」はどのような意味かという点である。

上記の文型7には意味の説明がついていて、そこには「前の文に書いた原因や理由で～という結果になる」と書かれているのだが、例えば、上の2例において、もし「というわけである」という形式がなかったとしても、これらの例においては、前の文が原因や理由で、後の文がその結果であるという関係は変わらない。すなわち、上の2例において「というわけであ

る」という文型が表しているのは、[原因・理由] vs [結果] という論理関係以外に求める必要が出てくる。

それで、筆者は大場美穂子（2013）において、「(という) わけである」の意味はどのようなものかということについて考察した（後ほど、その結論を簡単に述べる）。

ところで、この文型 7 の見出しの立て方が「～(という) わけである」となっていることから分かるように、文型 7 では（前の部分の接続形式の異なりはあるものの）「わけである」と「(という) わけである」は意味的にはおおよそ言い換えがきくというように扱われている。

確かに上の 2 例においては、「使われるようになったわけである。」「いつもとたくさん写真をとっているわけだ。」としてもあまり意味の違いを感じない。それで、大場（2013）でも、ひとまずは「(という) わけである」と「わけである」とは言い換え可能な形式として特に区別はせずに扱った。しかし、以下の例はどうだろうか。

(3) (国道で土砂崩れがあったと聞いて) 道理でバスが来ないわけだ。

この例では、「わけだ」は「(という) わけだ」には言い換えられないのではないか。

「わけだ」と「(という) わけだ」の違いを考察するというのは、実は、いわゆる内容補充の連体修飾節¹と補文標識「(という)」の関係を考察することと平行的な問題であると言ってよい。

本稿は、内容補充の連体修飾節全体にわたって補文標識「(という)」との関係を扱う用意はなく、今回の考察はあくまで「わけだ」と「(という) わけだ」の違いの考察にとどまるが、しかし、将来的には、補文標識「(という)」の全体的な考察を目指して、今回の考察がそれに資するものとなればよいと考えている。

2. 先行研究

ここでは、「わけだ」と「というわけだ」の違いについて論じた先行研究を二つ挙げたい。

2-1 鈴木美加（2000）

この論考は、そのタイトルにある通り、「わけだ」と「というわけだ」の違いを論じたものである。「わけだ」という形式にどのような意味機能の種類があるかということについては、明示的には述べられていないのだが、「わけだ」の先行研究として、森田良行（1989）、劉向東（1996）の論考が挙げられており、特に、鈴木（2000）の注に、劉（1996）の用法分類の全体が用例も含めて記載されていること、鈴木（2000）の用法の説明の術語に概ね劉（1996）のものが踏襲されていることから、劉（1996）の用法分類に従っているものとみられる。

劉（1996）は、「わけだ」の用法を細かく分けて記述しているが、鈴木（2000）では、その用法のうち、「意味・内容についての補足的説明」、「前掲の結論の根拠・理由づけ」、「理由についての補足的説明」の用法において、「というわけだ」の用例が見られたと報告されている。一方、それ以外の用法、すなわち、「推理・推論の帰結・結果」「P（原因）とQ（結果）の関係の提示」「既知情報の再提示」「常識・慣例・建材の事実の提示」の用法においては、「わけだ」のみが使われるとされている。つまり、すべての「わけだ」「というわけだ」が言い換えられるわけではないということ指摘した上で、先の3用法における「わけだ」と「というわけだ」の違いを論じているのである。鈴木（2000: 114）の結論は次のようである。

「トイウワケダには、他人の論理や解説を伝達する機能があり、他の人が言っている論理をもう一度わかりやすく言い直したり、相手の立場から相手の論理を組み立て、確認する時に使用されると考えられる。一方、ワケダには、自分の論理は解釈を説明する機能があると考えられる。」

具体的な例に沿って、この分析を見てみよう。次の例は、鈴木（2000）に「意味・内容についての補足的説明」を表す例として挙げられたものである²。

- (4) 坂本 モンゴルに行ったのは単純に風土や人間の暮らしぶりが見たかったからなんです。【略】砂漠にチョロチョロと草が生えている感じです。(中略)あの土壌では人間が食べられる穀物は勝手には生えてこない。だから羊や牛などの家畜に食べさせて、その家畜を人間が食べる。羊はすぐ草を食べ尽くしてしまうので、移動が必要になる。資源が少ないところでの共生。(中略)

生物学的にいうと宇宙基地モデル。資源が少なく、閉鎖系の土地ですべてが循環する開放系は太陽からのエネルギーだけ。どこか一つでもミスがあると死んでしまう。実は地球自体もそうなんです。宇宙基地と変わらない。かなりぎりぎりの共生系をやっているわけです。

浅田 モンゴルに行ったら宇宙基地だった、というわけね。【略】
(鈴木 2000 例 (10))

- (5) モンゴルに行ったら宇宙基地だったわけね。(鈴木 2000 例 (11))

例 (4) (5) の違いを鈴木 (2000) は以下のように説明する。

「(10) 【引用者注：本稿で引用した例 (4)】のトイウケダ文では、前の発言者の発言の内容を相手の論理でもう一度言い直すことにより相手の発言の意図を確認している。」(p.108)

「もし (11) 【引用者注：本稿で引用した例 (5)】の文があった場合には、相手の発言を受けて自分なりに解釈し、論理を組み立て、自分の側からその発言の内容を論理立て、確認するという印象を与える。」(p.108)

上のような鈴木 (2000) の指摘は筆者の内省にも合うものであるが、なぜ

このような違いが生まれるのかを考えるにあたっては、「と」が引用の助詞であるということ踏まえるのがよいと思われる。すなわち、「というわけだ」を用いた場合、「モンゴルに行ったら宇宙基地だった」という発言は他人の発言の引用であるということになるから、他人の論理と考えることができるのである。一方、「わけだ」を用いた場合には、他の引用ではないから、話者自身の論理を示すということになる。

なお、鈴木(2000)には「自分の論理であっても、トイウワケダが使用される場合もある」(p.114)という言及もある。以下の引用を参照されたい。

「また、自分の論理であっても、トイウワケダが使用される場合もあるが、結果・帰結の内容を先に提示していない時にはワケダが使用され、結果・帰結の内容が先に提示されており、その説明がなされた後でもう一度結果・帰結の内容を言う場合、微妙な差はあるもののトイウワケダもワケダも使用できる。」(p.114)

この説明についても、「と」が引用の助詞であるという点を踏まえると、少し見通しがよくなる。すなわち、自分の論理であっても、先に一度提示された内容を言う場合は、それを「引用する」という形で述べるのが可能であるから、「というわけだ」が用いられることもあり得、一方、先に提示された内容ではない場合には、引用の形式を使用することができないということである。しかし、自分の論理を引用として提示する場合と、そうでない場合とでどのような違いがあるのかという点については、鈴木(2000)にも「微妙な差」とある通り、もう少し説明が必要であるように思われる。

2-2 永谷直子(2002)

この論文も、「わけだ」と「というわけだ」の違いを論じたものである。分析の結果、「わけだ」と「というわけだ」はそれぞれ以下のような異なる意味を表すものであると結論付けられている。

「**というわけだ**」:「P【引用者注:二つの発話のうちの先行する発話】の発話者の視点に立って捉えたPの意味をQ【引用者注:後続する発話】の発話者が(わけだを伴う文の)発話時に再現する」態度を示す

「**わけだ**」:「Qの発話時に、発話Pの受け手(*)の視点に立って推測した結果をQの発話者が述べる」態度を示す

*発話Pの受け手は3.1の場合【引用者注:先行する文が話し手以外の発話の場合】は「わけだ」を伴う文の話し手であり、3.2の場合【先行する文が話し手の発話の場合】は「わけだ」を伴う文の聞き手である。(永谷 2002: 130)

この結論は概ね、先の鈴木(2002)と平行的であると言ってよいが、鈴木(2000)の「自分の論理」を提示する場合の「わけだ」と「**というわけだ**」は「微妙な差」であるという言及を受けて、その点が多く検討されている。次の「自分の論理」を提示する例を参照されたい。

- (6) 近所に迷惑をかけては、と思って草取りを始めたが、流れる汗をぶるぶる。なかなか手ごわいものだった。・・・そして入浴後、気づいたら両足にいくつもの赤い斑点。知らないうちに蚊の攻撃を受けていた {**というわけ／わけ**} である。(永谷 2002 例 (20))

永谷(2002)は、ここで「**というわけだ**」を用いた場合、「赤い斑点を発見した時点の話し手の心情をリアルに再現する」(p.129)のに対して、「わけだ」を用いた場合には、「**「斑点を発見したこと**」を知らされた聞き手の視点に立って「**斑点があるのは蚊に刺されたからだ**」という推論結果を想定し、それが話し手の提示する「(Pの)理由」と一致していることを示すのである。」(p.129)と説明する。

一部説明が複雑で筆者には理解できない部分もあるものの³、ここでも、先ほどと同様に「と」が引用であるということを踏まえると、少し見通しがよくなるようである。「**というわけだ**」は「赤い斑点」を“話し手が見つけた時”の心情を引用していると考えることができ、また「わけだ」は、

話し手の“発話時”の推論結果を提示していると考えられるのではないだろうか。

以上の記述から次のことが言える。「自分の論理」であっても「わけだ」だけでなく、引用の形で提示する「というわけである」も使用できる場合があるが、その場合には、引用の形式であることの効果として、発話時の論理ではなく、別の時点での論理を表すという違いが生じる。しかし、どちらにしても、話し手本人の論理には違いないから、他人の論理を引用する場合ほど大きな差があるわけではなく、したがって鈴木（2000）にある通り「微妙な差」にはとどまる。永谷（2002）はその違いを明らかにしようとしているのである。

以上、鈴木（2000）および永谷（2002）の考察から、「わけだ」と「というわけだ」の違いを論じる際には、「と」が引用の助詞であることを踏まえると見通しがよくなることが分かった。

2-3 連体修飾節と補文標識「という」に関する先行研究

以前、筆者は大場美穂子（2016）で連体修飾節と補文標識「という」に関する寺村秀夫（1975–1978）⁴および大島資生（2010）についてまとめた。補文標識「という」は特に外の関係における内容補充の連体修飾節と関わるが、連体修飾節と補文標識「という」の関係を考察する上では、次の3つの観点が重要であるとされている。

1. 修飾部の陳述度（修飾部の文構造）
2. 底の名詞の種類
3. 底の名詞の主節内の位置

今回のテーマとしている「わけだ」と「というわけだ」の違いについては、鈴木（2000）、永谷（2002）で十分に議論されているが、本稿では上記のような、補文標識「という」全体とのかかわりを視野に入れて、整理しておくことにしたい。

3. 分析

3-1 「わけだ」の意味と用法分類（承前）

筆者は、大場美穂子（2013）で「わけだ」の意味と用法について考察したことがある。その際、「わけだ」を基本的な意味を次のように結論付けた。

「わけだ」の基本的な意味：

「わけだ」を伴う文が表す事柄が文脈の中ですでに話し手と聞き手の了解事項として存在することを表し、「わけだ」を用いてその事柄を確認するという働きを持つ。

そして、実際に「わけだ」が使用される場合として3つの用法を挙げた。以下に例とともに示す。

A：これまでに述べられた事柄を、話し手と聞き手に共有された事柄として再度確認する。

- (7) 三島の回想によれば、彼はその一世を風靡した人気作家に向かって「僕は太宰さんの文学はきらいです」と言った。すると太宰は誰にもなく「そんなことを言ったって、こうして来ているんだから、やっぱり好きなんだよな」と言ったという。三島は「今では自分も同じ目にあうようになった」と書いている。若い人々が三島のところにやってきて、面と向かって「僕はあなたの作品が好きじゃない」と宣言するわけだ。（村上春樹『サラダ好きのライオン 村上ラジオ 3』）

この例では、「わけだ」の文の直前には「三島は「今では自分も同じ目にあうようになった」と書いている。」とあり、この文が述べられた時点でこの情報が話し手と聞き手の間で共有されたことになる。そして、後に続く「わけだ」の文は、一度共有された情報を別の言い方（「若い人々が三

島のところにやってきて、面と向かって「僕はあなたの作品が好きじゃない」と宣言する」) で再提示する機能を果たしている。このような「わけだ」の用法を A とした。

B：これから論を展開するに当たり、その前提となるような、話し手と聞き手に共有されている事柄について確認する。

- (8) 大学はいま市場による淘汰が進んで、どこも危機的状況なわけです。だから、「危機だ、危機だ」っていう警鐘を鳴らさないと、制度改革も意識改革も進まない。(内田樹・名越康文『14歳の子を持つ親たちへ』)

例(8)を用いて説明すると、「「危機だ、危機だ」っていう警鐘を鳴らさないと、制度改革も意識改革も進まない。」という提言を行うに先立って、「大学はいま市場による淘汰が進んで、どこも危機的状況」であることをまず確認しているのであるが、その内容がこれまで多くの人に指摘され、多くの人が共通の認識として持っている事実であるということを「わけだ」が示している。このような用法を B とした。

C：新情報を際立たせるために、述語部分が話し手と聞き手に共有される事柄であることについて確認する。

- (9) 話は変わって、このあいだ近所の魚屋さんに行ったら、シシャモを男女(つまり雄雌)別に並べて売っていた。値段は雄のほうがだんぜん安い。雌は子持ちで卵を持っているから、そのぶん価値が高いわけだ。(村上春樹『サラダ好きのライオン 村上ラジオ 3』)

上の例の2番目の文では「値段は雄のほうがだんぜん安い」と述べているから、3番目の文の中の「雌は価値が高い」という後半部分はすでに話し手と聞き手の間で共有されている情報であると言ってよい。つまり3番目の文においては、「雌は子持ちで卵を持っているから」という部分がこの

文で新しく提示されている情報であるということになる。「わけだ」はそのような情報の新旧を表しているということができる。このような用法をCとした。

3-2 今回の分析の前提

これから「わけだ」と「というわけだ」の違いについて述べていくこととする。両者の違いについては、もちろん連体修飾節と補文標識「という」とのかかわりという観点を入れなくても論じることができる。しかし、今回はそのような観点を少し入れて、両者の違いを整理してみたい。

前回の考察の際には、「わけだ」をひとまとまりの文末表現として扱い、「わけ」がもともと名詞であったということについては考慮してこなかったが、補文標識「という」との関連で論じるためには、「わけだ」を「連体修飾節＋名詞 [わけ] ＋助動詞 [だ]」というように考える必要がある。

3-2-1 底の名詞の主節における位置

先に2-3で述べたように、内容補充の連体修飾節について「という」の介在の可否を考察する際には、底の名詞の主節における位置についても考えなければならないという指摘がある。今回の考察の対象となる底の名詞「わけ」について、次の例を比較されたい。

- (10) 彼女が私にチョコレートをくれたわけについては、考えないようにしている。
- (11) 彼女は、私が引越しを手伝ったから、チョコレートをくれた（という）わけである。

これら二つの例においては、底の名詞はどちらも「わけ」であって、連体修飾節の内容もほぼ同じ（「私にチョコレートをくれた」）であるが、例(10)においては「という」を介在させることはできないのに対して、例(11)はそれが可能である。

なぜ例(10)において「という」を介在させられないのかというと、この

例における連体修飾節はふつうの内容補充の節とは言えず、寺村（1973）のいう相対的補充の節だからである。この例では「あるわけ（＝理由）で彼女が私にチョコレートくれた」という内容が提示されているから、「彼女が私にチョコレートくれた」という部分は理由（＝わけ）ではなく結果である。だから、「彼女がチョコレートくれた」という節は内容補充の節ということができず、そのため、「という」を介在させることができない⁵。

例（10）に「という」が介在させられない理由は、今述べたように連体修飾節が底の名詞の内容補充の節になっているのかどうかという点から説明できるのであるが、しかし、「わけ」と連体修飾節との関係が内容補充の関係であるのかを考える手掛かりはどこにあるのかを考えてみると、それは、主節において「わけ」がどのような位置に置かれているかによる。つまり、「という」の介在の可否を決める要因は底の名詞の主節内での位置であるとも言えるのである。

このような点について寺村（1993）は、「事実」を底の名詞とする連体修飾節を考察した後で次のように述べている。

「事実」が上のように使われる例【引用者注：修飾部が「という」を伴わずに現れる例】は非常に多いが、手もとに集まった例を見ると、それに「アル／ナイ」「～ダ」がつづいて文が終わっているのが圧倒的に多い。そうでなく一般の名詞と同じように、いろいろな助詞がついて後の用言にかかっていくことはもちろん可能であるが、どういうわけか、そのときは「トイウ」が入っている例がよく見られる。しかし、これはまだどれ位一般的な傾向かといえる段階ではない。（寺村 1993: 276）

このような指摘はいろいろなところでされているものの、それを詳細に論じたものは管見の限りではあまりない。その中で、大島資生（2010）は、底の名詞が主節内のどのような位置に置かれるかによって「という」の介

在の可否が変わってくるという点についての詳しい考察であると言ってよく、大変興味深い論考である。しかし、考察に際しては、先に述べた通り、底の名詞の主節内の位置という変数のほかに、内容補充節の陳述度、底の名詞の種類というような変数も複雑にかかわっていて、それらの変数を整理して考察するというのはなかなか難しい。

今回、「わけだ」と「というわけだ」を比較しようと考えたのは、その比較においては、ひとまず底の名詞の主節内での位置については固定できるからである。主節の構造はすべて同じく「わけだ」である。この点で、考察が容易になると考えた。

3-2-2 修飾部の陳述度（文構造）

もう一つ、「わけだ」と「というわけだ」の言い換えがきく例を見ていく前に指摘しておかなければならないことがある。それは、「わけだ」「というわけだ」に前接する節の陳述度（文構造）である。「わけだ」は連体形に接続し、「というわけだ」は引用部に接続する。したがって、「というわけだ」は以下のような陳述度の高い文や文の途中で言いさした形などにも接続できるが、「わけだ」にはそれができない。

(12) 最初の八人がたてつづけに死んだとき『組織』から私に呼びだしがかかりました。死因を究明してくれというわけです。私としちゃ正直言ってもうあそこは関りあいになりたくはなかったが、私の開発した技術でもあるし、人の生き死にの問題でもあるので、見捨てておくわけにもいかんです。とにかく様子を見に行くことにしました。（『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』）

(13) 昼休みのチャイムが鳴ると、みんな様にホッとした表情になった。やれやれ、これで半日は無事に過ぎたか、というわけである。（『女社長に乾杯』）

(14) 「そうですか。ともかく、お帰りになってからも、五百万の件は、社

長のご両親へも秘密に願います。どこから話が漏れるか分かりませんので、慎重の上にも慎重に、というわけです。その点をお約束下さいますか？」(『女社長に乾杯』)

ここから先の比較では、これらのような例については、除外して考えることとする。除外するにあたっては、本来であれば、ここで使われている「というわけだ」が以下で扱う「というわけだ」と同じなのかどうかを検討する必要があるが、今回はそれは見送ることとする。

3-2-3 底の名詞「わけ」の意味

主節の構造を「わけだ」に固定した場合、底の名詞「わけ」は、ほぼ「事柄の道理、筋道」という意味であると言ってよい。これは言い換えると、「わけだ」という構造における「わけ」の連体修飾節はすべて内容補充の節であるということである。

3-3 本稿の立場

「わけだ」と「というわけだ」の違いは、先に見た鈴木(2000)、永谷(2002)の立場を踏襲し、ここに「という」が引用の形式であるという観点を入れて、次のように考えることとしたい。

■「わけだ」「というわけだ」の共通の意味と機能

「(という)わけだ」を伴う文が表す事柄が文脈の中ですでに話し手と聞き手の了解事項として存在することを表す。

- 「わけだ」：話し手と聞き手の了解事項として存在する事柄を、発話時の話し手の論理で再構築して提示する。
- 「というわけだ」：話し手と聞き手の了解事項として存在する事柄を、以前提示されたものを引用するという形で提示する。

場合1：以前、他者から提示されたものを引用する

場合2：以前、自分で提示したものを引用する

以下では、先に挙げたA～Cの各用法について、「わけだ」と「というわけだ」の使用を具体的に考える。

3-3-1 用法Aの「わけだ」「というわけだ」

用法Aの「わけだ」「というわけだ」は概ね言い換えがきくと言ってよい。ただし、言い換えた場合には、少し意味が異なっている。

- (15) (自分の姪が川辺に相談している席に同席している)

「私、伯母さまのように頭がよくないから、自分の考えていることがうまくまとめられないのよ」

と言った。

「しようのない人ねえ。じゃあ私が整理して上げるわ。あなたはつまり千原達也氏との結婚をもう一度蒸し返そうとしているんでしょう。当り前のことだけれどこれは達也さんと合意の上だというのね」

「その通りですわ。彼が承知していないでこんな話持ち出せる筈ないでしょう」

「そう、つまりそれが川辺先生に御相談したい目的の一つというわけね」(『食卓のない家』)

- (16) 「私というものを、ほんとうに理解していただくには、私の出生の秘密を話さなければならないわ。つまり私は、正当でない結婚の中に生れた子供というわけ。よしましょうね、こんな話」(『孤高の人』)

例(15)において「というわけだ」が使われているのは、これが引用として示され、自分の論理ではなく、姪の論理であるということを示すためである。これを「一つのわけね」と変えた場合には発話時の話し手の論理であることになるから、意味が変わると言える。

例(16)は、先に「出生の秘密を話さなければならない」という部分が示され、それが聞き手と共有された後に、再度その秘密とは「正当でない

中に生まれた子供」であることだと述べている。「というわけだ」が使われているから、引用としての話し手の論理だということになる。これを「わけだ」に変えた場合でもそれほど大きくは意味に違いが出ない。その理由は、これを引用として提示しても、発話時の話し手の論理として提示しても、直前の自分の発話に関する話し手の論理の再提示であることに変わりないからであろう。

3-3-2 用法Bの「わけだ」

用法Bは、「わけだ」が使用されるのが通常で、「というわけだ」は使用されにくい。以下の例を参照されたい。

- (17) 見事に失敗してしまったわけですが、すみません、助けてくださいませんか。

この例ではこれから「助けてくださいませんか」と頼むのに先立ち、その前提として、「失敗した」ことに言及している（失敗したことについては、言語化はされてはいないものの話し手と聞き手の了解事項であると考えられる）。ここで「わけだ」が使われているのは、自分が失敗したという了解事項を頼む前提として敢えて差し出すのだから、他からの引用とするのは無責任であると考えられるためである。もしここに「というわけだ」を使うと、頼みごとの前提についての説明を他からの引用によって提示することになり、頼みごとをするということになじまない。

このように、Bの用法は、これからの論の展開のために、すでに共通の理解である事項を取って前提として提示するという用法だから、これから持論を展開するということと他からの引用で済ますという態度がなじまず、そのため、「というわけだ」は使いにくいのだと思われる。

3-3-3 用法Cの「わけだ」と「というわけだ」

用法Cの「わけだ」「というわけだ」は概ね言い換えがきく。ただし、言い換えた場合には、少し意味が異なっている。

- (18) 警察長官は、ブン先生の方を怒りをこめてふりかえった。

「憎いからこそ、長生きしてもらわねばならぬのだ。ブンはわれわれを散々に、苦しめおった。その分、刑務所で、ブンに苦しんでもらわにゃいかん。できるだけ長くな！でき得るならば、三百十七年間、たつぷりと、刑務所で苦しんでもらわにゃいかんのだ」

「なるほど。それで、すこしでも健康によいようにと、こんなすてきな場所に、かくもすばらしい刑務所をたてたというわけか」(『ブンとブン』)

- (19) 「ええ私はね。実はゲーリーは私たちの養子なの。ボブと結婚して五年もの間、私たちに子供が出来なかったので養子を捜していたら、ちょうど運良くあの子をもらうことが出来たの。本当の父親は分らないし、母親もアル中で育てる意志がなかったから、産んですぐ貰い受けたというわけよ」(『若き数学者のアメリカ』)

最初の例は、目の前のすばらしい刑務所をたてた理由が話の中で今初めて分かったということが「というわけだ」で示されている。この時、「ブン先生」は「警察長官」の論理を引用するという形で、自分が「警察長官」の立場になって考えたということを示す。ここで「わけだ」を使った場合には、相手の話を自分の立場で述べ直したというように意味が変わる。

次の例は、一人の人の発話ではあるが、まず「ゲーリーは養子だ」という事実を述べ、これを聞き手との共通事項としている。その後、「ゲーリー」をなぜ養子にしたのかについて述べているのが「というわけだ」の文である。この時、「というわけだ」が用いられているのは、これが「ゲーリー」を養子にした時点の話し手の論理を引用しているからである。ここで「わけだ」を用いれば、「ゲーリー」を養子にした時点での論理ではなく、発話時の話し手の論理ということになる。ただし、どちらの場合でも、話し手の論理であることは共通で、また、当時の論理と発話時の論理

とあまり変化がないから、「というわけだ」を「わけだ」に入れ替えても大きな違いを感じない。

3-4 補文標識「という」をめぐって

以上、非常に駆け足ではあるが、「わけだ」と「というわけだ」の違いについて見てきた。この比較によって「という」には次のような性格があることが分かる。

- ①「という」は引用の形式である。
- ② 引用の結果、他者の論理を述べることができるようになる。
- ③ 引用の結果、それが自分の論理の引用であっても、その場合には、発話時から離れることができる。

4. むすび

今回の論考は、鈴木（2000）、永谷（2002）に負うところが極めて大きい。しかし、ここに補文標識「という」全体とのかかわりという視点を入れ、また、引用形式という観点から鈴木（2000）、永谷（2002）について整理しなおしたことなどは本稿なりの視点であったはずである。まだ積み残した問題は多いが、今回はここまでとしたい。

注

- 1 寺村秀夫（1973）の用語。このほかに「底の名詞」（＝被修飾名詞）などの用語も寺村の一連の論考に倣って使用することとする。また、内容補充の連体修飾節と底の名詞の間に介在することがある「という」という形式については、「補文標識」と呼ぶことがある。
- 2 以下の例文は鈴木（2000）からの引用。引用に際して一部省略した部分は、「【略】」とした。鈴木（2000）で省略されている箇所は「（中略）」という記載になっている。
- 3 引用のうちの「「斑点を発見したこと」を知らされた聞き手の視点に立って「斑点があるのは蚊に刺されたからだ」という推論結果を想定し」という部分がなぜ必要であるのかが不明である。この部分は「わけだ（というわけだ）」が全体としてどのような用法を持ち、どのような意味を表しているかという点と関係があるのではないかと思われる。永谷（2002）にはその記述はないが、後に書かれた永谷（2010）には次のようにある。「「わけだ」の基本的意味として「推論の必然的な帰結」という定義は回避し、「筋道」を「聞き手が納得

- すること」として差し出す表現」と考えることとする。」(永谷 2010: 30)
- 4 寺村秀夫は、1975 年から 1978 年の 4 回に渡って、「連体修飾のシンタクスと意味」というタイトルの論文を大阪外国語大学留学生別科編『日本語・日本文化』に掲載した。これらの論文はのちに、『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』（くろしお出版 1993）にまとめられている。本論文での引用は寺村（1993）を使用している。
 - 5 一方、例（11）について考えてみると、この例の「わけ」は「理由」という意味ではなく、「事柄の道理、筋道」というような意味であると考えられる。この場合、「引越しを手伝ったから、彼女が私にチョコレートをくれた」という連体修飾節は、どんな道理なのかというような「わけ」の内容補充の節と言ってよいと思われる。

参考文献

- 大島資生（2010）『日本語修飾部構造の研究』ひつじ書房
- 大場美穂子（2013）「『わけだ』『わけではない』の用法についての一考察」『日本語と日本語教育』41 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター pp. 47-66
- 大場美穂子（2016）「補文標識「という」に関する一考察」『日本語と日本語教育』44 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター pp. 1-19
- 鈴木美加（2000）「ワケダとトイウワケダの意味機能の違いについて」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26 pp. 103-117
- 寺村秀夫（1975, 1977.3, 1977.9, 1978）「連体修飾のシンタクスと意味（1）～（4）」『日本語・日本文化』4～7 大阪外国語大学留学生別科
- 寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅰ 一日本語文法編一』くろしお出版
- 永谷直子（2002）「『わけだ』と『というわけだ』」早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻北條淳子研究室編『北條淳子教授古稀記念論集』早稲田大学日本語研究教育センター初級教科書研究会 pp. 120-131
- 永谷直子（2010）「話し手・聞き手の「領域」から見た『わけだ』」『東京大学留学生センター教育研究論集』16 pp. 29-41
- 森田良行（1989）『基礎日本語』角川書店
- 劉 向東（1996）「『わけだ』文に関する一考察」『日本語教育』88 日本語教育学会 pp. 48-60